連載小説〈PARTⅣ・最終回〉

イノセント・イモラル・マミー

佐々木湘

絵／土井 稔

六

翌朝、ママは朝から何回もトイレに行っていた。ねぼけた頭で、ママに聞いた。

「どうしたの気分悪いの？」

「二日酔い」

「二日酔い？」

「うん。強い酒の飲み過ぎ。頭ががんがんするわ」

「何時？」

「八時」

「起きようかな。今日は自由市場に行くって行ってたけれど、ママどうする？」

「やめるわ。ホテルで寝ている」

「もったいないなあ」

「うん。でもどうしようもない」

「朝ご飯は？」

「いらない」

ママは青い顔をして、枕につっぷしていた。

ホテルの食堂に行くと、張さんが手を振った。

「ママさんは？」

「二日酔いなんだって」

「二日酔い？」

「夕べひどく飲んだの？」
「そうね」
張さんが手を振ったので振りかえるとパパと山崎さんが入ってきた。
「美香、明彦知らないか？」
「いないの？」
「うん。どこ行ったんだろう。朝早くから」
バイキングの朝食をしていると、お兄ちゃんが入ってきた。
「なんだ、お前どこ行ってたんだ」
「朝市。あーあ、そんなもん食うより、外の方がよっぽど安くて旨いのに」
「なこと言ったって、朝食は費用の中にふくまれてるんやで、明彦君。外で食べたら別料金。どっちが得か」
「まあ、ね。コーヒー飲もう」
「あ、俺たちのも取ってきて」
とパパ。
「じゃ、美香も来いよ」
えーっ、まだ食べてるのにー、というとお兄ちゃんが目配せした。
「何？」
コーヒーのところでお兄ちゃんに聞いた。
「さっき外で好田に会ったんだ」
「好田さん？」
「うん。あいつどんな奴だ？」
「どんなって」
「卑劣な奴？」
「知らないわ」
「ともかくさ、ちょっと話があるからあとでロビーに来い」
お兄ちゃんはなにくわぬ顔をして席に戻ると公園で見てきた大極拳の話をした。
食事を終えると張さんが近づいてきて、九時半に出発しますから、と言った。山崎さんと張さんが打合せている間、パパはママの様子を見てくる、と上がった。
私はお兄ちゃんとロビーの隅に座った。
「好田さんがどうかしたの」
「今朝早く、ママを見た、っていうんだ」
「今朝？」
「うん。正確にいうとママと思われる女の人とすれちがったって」
「はっきりしてるわけじゃないの」
「うん。ママの匂いがしたって」
「匂い？」
「中国の香水。昨日からつけてるあれだ」
「ふーん。でもママは今朝はひどい二日酔いで朝からなんどもゲロゲロしてるよ」
「夕べは？」
「いつ帰ってきたか知らないわ」
それって、私は言いかけて怖くなってやめた。
お兄ちゃんは冷ややかに言い放った。
「好田が俺にほのめかしたいのは、ママが張さんの部屋から朝帰りしたところを目撃したぞ、ってことなんだ」
「……」
「ママのアリバイを証明できるのは美香、お前だけだ」
そうかもしれない。だけれど、私は本当に知らないのだ、ママがいつ帰ってきたのか。
「いつ、なんのためにアリバイ証明がいるの？」
「好田がパパにたれこむか、うわさを流すかどちらかしたときに」
「でも誰に？　誰にママの潔白を証明するのよ」
「決まってるじゃないか、親父に、だ」
私はおとといの夜のパパと山崎さんの会話を思いだしていた。
「パパは証明なんかしなくても、ママを疑ったりしないわ」
「子供だな」
「違う。私には分かるのよ」

「まあ、いい。好田には気をつけよう、いいな」
「わかった」

昆明の自由市場。小さな屋台級の店がところせまし、と延々と続いていた。私は入口のところで、懐にかわいい子犬を抱いているおばさんにつかまってしまった。黒く角質化した手で腕をつかまれ、懐の犬をみせた。
「かわいい」
スピルバーグの「グレムリン」という映画の冒頭、モグアイという不思議な動物が出てくる。あれにそっくりなのだ。目が大きくて、まるでぬいぐるみそのものだった。手を出して思わず抱き上げると、中国語で値段を言ってくる。深井さんが
「美香ちゃん、駄目だよ。動植物は持って帰れない」
と忠告したので、犬を返すと、値段が折り合わないと思ったのか、追いかけてきてしつこくつきまとい値段を下げてくる。
深井さんが激しい口調で
「プーヨウ、プーヨウ」
と言ったのでようやく諦めた。一行とはぐれてまごまごしていると好田さんが見えた。通りに立って自動車を物色していた。なにしてるんだろう、と思っているとお兄ちゃんたちが戻ってきて、
「自由行動。十二時にあの角の薬屋・福林堂前集合だ」
と言った。視界の端に入っていた好田さんがタクシーを止めたので、私はびっくりして、お兄ちゃんの袖を引っ張った。お兄ちゃんは顔色を変えた。
あわてて深井さんを連れて通りを向こうに渡るとタクシーを止め、一人で乗り込んだ。私はあわてて追いかけた。お兄ちゃんは私に手をあげた。
「どこ、行ったの？」
深井さんに聞くと、
「お母さんの様子を見に行くって、ホテルに。親孝行なんだ、結構」

好田さんがホテルに戻ると思ったんだろうか。私は事態をよく理解できないまま、不安だけをつのらせた。

昼過ぎ、食事を終えてホテルに戻るとママが上機嫌でお兄ちゃんとラウンジにいた。華やかなワンピースを着て、張さんに手を振った。
「ああ、それよく似合いますね。綺麗ですよ」
と張さん。
「どうしたの？　それ？」
「張さんがね、見立ててくれたのよ、夕べ」
「ちょっと派手じゃない」
「いいのよ」
とママはまるで気にしない。
私はお兄ちゃんに
「どうだった？」
とそっと聞いた。
「ああ、杞憂、って奴さ」
お兄ちゃんはそれ以上話してくれなかった。ママの「朝帰り」事件はそれっきりで、私の出る幕はなかった。

九泊十日の雲南の旅はあっというまに終わった。上海空港で、張さんはとても寂しそうな顔をしていた。搭乗手続きを待つ間にどこかに消えたかと思うと、ママに紙袋を渡した。
「今、あけないで」
張さんは首をゆっくり振ってママを見た。
「なにかしら？　ありがとう」
搭乗の案内のアナウンスが流れた。
張さんは声を張り上げた。
「はい。お入り下さい。みなさん。さようなら。再見！」
ツァイチェン、習いたての中国語で、皆は手をふったり、握手したりしてゲートの向こうに消えた。パパは、張さんの肩を叩いて
「日本に来ることがあったら、是非わが家に来てくださ

い」

と言った。

「謝謝。必ず連絡します」

「きっとね」

と私も言って握手した。張さんの手は湿って温かった。ママは最後に残った。

握手して、次の瞬間、目もとまらぬ速さで二人は抱きあって、離れた。

ゲートを通りながら振り向いた私は、それを見て思わず前を行くパパたちを見た。パパは山崎さんと何か話していた。再び張さんの方を見た時にはもうママは居なかった。張さんが手を振っている。

「美香、さっさと歩きなさい」

すぐ横でママの声がして驚いた。

ママは後ろを振り向きもせずスタスタ歩いていた。いつものゲランのシャリマーの香りが漂った。中国の香水はやめたのだろうか。

関西空港に降り立つと、冷気が身にしみた。

正月あけの、賑わいと寂しさの同居したような日本。パパは中二日おいて福岡に帰った。学校が始まり、日常が戻った。おみやげを友達に配っているとき、ふっと空港で張さんがママに渡した紙袋の中身が気になった。ママはそれを話題にしなかったので忘れていたのだ。始業式で早く帰ったのをいいことにママの部屋に忍び込んだ。ワードローブの中に紙袋はあった。セロファンの袋が開いていた。そっと取り出して広げた。淡いピンクのシルクのバスローブだった。私は胸がどきどきして、あわててもとにもどした。

ママは中国から帰ってから、明るい色めのヘアダイをして、パーマをかけた。ルージュも明るい色に変えて、ばんばん仕事をしはじた。中国から国際電話がかかると一日中うきうきしている。

ママが明るくなったのは嬉しいけれど、中国体験は私にとってはちょっと刺激がきつすぎた。日常がつまらなく思えて困った。

あの日、までは……。

七

一月十七日。

ガクンとどこか高いところから地上に叩きつけられるような震動であわてて飛び起きた。とたんにがしゃがしゃと横に揺すられた。

なに？

ベッドから下りようとしてやめた。蒲団にもぐり込んだ。どーっと本が落ちてきたからだ。こわい。なにがなんだかわからなかった。地震？　うそ。夢かと思った。夢の中で、怖い目にあってこれは夢に違いないと思うとき、手の甲をつねってみる。痛くないことを確認して、度胸がつく。そんなことを何度も経験している私は、真っ暗な蒲団の中で、手をつねった。痛い。夢じゃない、と思った途端、ママあっ、と叫んでいた。震動がおさまっても体が震えて金縛りにあったようだった。

「美香、明彦、大丈夫か！」

パパの大声が階下から聞こえた。そうだ、パパは連休で帰って来ていたんだ。明けの今日、福岡に帰ると言っていた。ママは？　ママはどこ？

「パパ、俺は大丈夫だ。美香、美香」

お兄ちゃんの声。蒲団の下でもがいた。なにかの下敷きになっていて動けない。

ドーン、と音がした。

「美香の部屋、ドアがあかないよ。美香、美香、返事をしろ」

お兄ちゃんの反狂乱になった声が聞こえた。私は、助けて、と声を出した。でもお兄ちゃんには聞こえない。

「明彦、落ちつけ。耳を済ませるんだ。何か聞こえる。美香、大丈夫か」

「ダイジョウブ、デモ動ケナイ」

「怪我は？」

「ナイミタイ。ナンカ本箱カナ、倒レテル」

「わかった。じっとしてろ。明彦、ドアを破るぞ」

すさまじい音がして、光が差し込んだ。パパの懐中電灯だった。

十分後、私はスチールの本棚の下から助け出されて、階下で恐怖と寒さにガタガタ震えていた。

テレビもつかない、お兄ちゃんは自分の部屋に携帯ラジオを探しに行った。

「ママ大丈夫だろうか？」

月曜担当が祭日のせいで火曜になって、五時過ぎには家を出ているはずだった。

「うん、今ごろ車の中だと思うけど」

パパは携帯電話を呼び出した。通じない。放送局に電話した。使用中。

「電話が殺到してるんだ」

「震度6だって?!」

兄ちゃんが携帯ラジオのボリュームを最大にあげて下りてきた。

電気もガスもつかず、やがて電話も通じなくなった。

「明彦、水だ。風呂に水ためるんだ。やかんもなべも」

「私もなにかする」

「大丈夫か、美香」

「うん」

体のあちこちが痛かったけれど、そんなこと言ってられなかった。

少しずつ明るくなって来ると、あちこちから悲鳴や鳴き声が聞こえてきた。

外に出たパパは、血相を変えて戻ってきた。

「なんてことだ！　地獄だ！　隣の家が潰れてる。隣だけじゃないぞ。明彦来い、隣のおじいちゃんが下敷きなんだ。」

私はパジャマの上にママのコートをはおり外に出た。近所の人たちが集まり、潰れた家に向かって大声で呼びかけていた。

「居たら大きい声で返事をして下さい！　助けに行きますから。どこですか！　おお、あっちだ」

何分たったろう。何時間だったのだろう。あたりがす

っかり明るくなるころには寒さも忘れて、皆泥や汗だらけだった。
そして、誰かが言った。
「阪神高速が落ちた」
頭から血が引く、とはこのことか。
パパを見た。髪を掻きむしっていた。お兄ちゃんがパパを支えた。ぐらっと倒れそうになったからだ。
私たちは無言で家まで歩いた。
ラジオは緊迫した声で臨時ニュースを伝えていた。
ママの番組は九時からだった。あと五分で始まるはずだ。生きていれば、生きていればママの声がきける。
いつものオープニングの音楽が聞こえ、パーソナリティの人の声が流れた。
「とんでもない地震が阪神間を襲いました。われわれのスタッフも半分は来ていません。ここに居るものだけで、地震関係の情報をお伝えします。阪神高速が落ちています。信じられません」
真っ暗な闇の中に叩きおとされたようだった。時間から考えて、まちがいなくママは高速に乗っている。テレビのつかない私たちには、阪神高速がこっぱみじんにくだけちり、車という車が落下している情景しか浮かばなかった。
「いいから、ママを出せ。ママ、ママ」
パパは反狂乱だった。ラジオを揺すった。電波が乱れた。お兄ちゃんはパパの手からラジオを取ると、
「落ちついてよ。大丈夫だよ。死んだりしないよ」
と叫んだ。
頭をかかえて床にうずくまるパパの背中に私は思わず抱きついた。
お兄ちゃんは、チューニングを合わせなおした。
電気のつかない薄暗い居間で私たちは息をひそめていた。ママの担当の時間になれば、声が聞こえてくるはずだ。生きていれば。あと二分、一分、三十秒……。秒針の動くのがこんなに遅いなんて。
「みなさん、お早うございます。宮内真弓です」
ギャーとも、あー、ともつかない声が全員の喉から絞りでた。抱き合う三人にママの声は興奮しながらも、りん、と響いてきた。
「みなさん、私は崩れおちる阪神高速の上を走ってきました。すごい閃光が走った途端、道路がまるで蛇がのたうつようにうねったのです。
私の車のバックミラーに写っていた後続車が、滑り台を滑るように落下しました。死に物狂いでここまできました。
自宅へ電話しました。通じません。
私の自宅にある神戸市灘区はかなり被害がひどいようです。
みなさんは今、どんな状態でこの放送をお聞きでしょうか。放送局のある大阪は、室内の被害だけですんでいるようです。でも、阪神間のみなさまは、このラジオだけが唯一のたよりなのではないでしょうか。少しでもお役にたてる情報を流せるよう努力したいと思います」
少し間があった。局の内部でもまだ混乱が続いているようだった。
ママは続けた。静かな、しかし重い声だった。
「リスナーの皆さん、＜日常＞が＜日常＞でなくなった時、＜普通＞や＜あたり前＞がどれだけすばらしいことかを、今私は思い知らされています」
パパが嗚咽した。視界が歪んだ。

――了――

★好評をいただきました「イノセント・イモラル・マミー」は、今回で終了です。これを第一部とし、第二部はお兄ちゃんこと明彦の語る「謎とき」を加え、新潮社より単行本が出る予定。ご期待ください。

第19回神戸文学賞佳作<第3回>

ウーマン・ノー・クライ

木村 光理

絵／森澤 達夫

僕の頭のなかには、プリンキピアとか、鬼火とか、偏狭とか、神経衰弱とか、難しい言葉がぎゅうぎゅう詰めに詰まっていた。図書館で借りたへんてこりんな本のせいだ。僕はニライカナイについて調べるために、市立図書館へ行ったのだ。そして、へんてこな本につかまり、世の中は僕の知らないことだらけだ、ってことに気づかされた。

窓の外には細かい雨が降り、家の中はしーんと静まり返っていた。

母は朝早くからテニススクールのバザーに出かけていたし、父は昼過ぎまで起きてこないだろう。休みになると、ずっとそうだ。疲れた、疲れたを連発してトドのように眠りこんでいる。まるで疲れるために生きているようなもんだ。

僕は傘を手に、外へ出た。難しい本を読み過ぎたせいで頭がオーバーヒートしていた。あてがあるわけではなかった。ただ、どこか違ったところへ行きたかった。

雨雲が頭のすぐ上まで降りてきていて、そこから落ちてくる雨の粒がはっきりと見えた。

叔母のところへ行こうかな。

僕は迷いながら、しばらく考えた。それから傘をすぼめ歩道に真っすぐに立てた。手を離すと、傘は叔母のアパートの方角を指して倒れた。

細かい雨は、バスを降り坂道を登りきってもまだ続いていた。雨の森を速足で抜け、草地に出ると、叔母のアパートが古い時代の遺跡のようにぼんやりと霞んでいた。雨降りだと、なにもかも歳をとって見えるらしい。

草地の中の小道を小走りで進み、玄関のロビーから暗いホールに出ると、僕はほっと息をついた。ホールは相変わらず静まり返っていた。なんの物音も聞こえてこない。かすかに雨の音だけが聞こえた。

階段を上り、叔母の部屋の前までやってくると、今までの静寂を破るように、激しくののしりあう声が聞こえた。

どうしたんだろう？

僕はドアのノブをつかんだ。鍵はかかっていなかった。

そっとドアを開くと、薄暗がりの向こうに男の後ろ姿が見えた。僕はスニーカーを履いたまま部屋に上がりこんだ。そして、後ろから気づかれぬように男に近づいた。手のひらに汗が滲んだ。

あと一メートルの距離まで近づいた時、ふいに男が振り向いた。

南洋植物園の技師だった。

彼は痩せこけた体に大きすぎる緑色のパジャマを着ていた。そのパジャマには見覚えがあった。叔父のパジャマだ。

乱れた髪の毛を手でかきあげながら、細い血管が幾つも浮き上がった目で技師は僕を見つめた。僕は目が痛くなるほど力をこめて睨み返した。技師はいつもの技師ではなかった。彼の顔からはいつもの気弱で当惑したような表情は消えていた。植物園の技師ではなく動物園のゴリラの飼育係みたいだ。

床には叔母がうずくまっていた。素っ裸だった。

叔母は泣きじゃくっていた。

技師はパジャマを脱ぎ捨てると、床から南洋植物園のグリーンの制服を拾いあげた。僕は技師が着替えるのを、じっと見つめていた。どうしていいかわからなかったのだ。雨の日特有の灰色の光の中で、技師は赤黒く、怒っているように見えた。

着替えをすました技師は、僕のわきを通り抜けようとして擦れ違い様、吐き捨てるように言った。

「狂ってるよ、この女。ほんとうに狂ってる。まともなやつにはとても相手なんてできない。亭主が自殺するはずだ」

僕は半ば反射的に技師に殴りかかった。その言葉は、叔母を侮辱するだけでなく、亡くなった叔父を侮辱することになる。絶対に許せない。

だけど、尊敬する黒人ボクサー、シュガー・レイ・レナードなみのパンチというわけにはいかなかった。パンチは技師の腹をわずかにかすっただけで空を切った。
「なんなんだよ、こいつ！」
技師は蝿を追っ払うように、僕を床に突き倒した。僕は起き上がると、もう一度技師に殴りかかった。今度は、彼の手にブロックされて、パンチは腹にさえ届かなかった。技師はまた僕を突き倒した。
「やめて！　やめて！」
叔母が叫ぶように言った。僕は起き上がると、なおも技師めがけて殴りかかった。
「何するんだよ！」
技師は僕の腕をつかんだ。痩せた細い腕からは想像もできない力だった。彼は怒りに目を充血させて僕を睨みつけた。
「出てって！　早く出てって！」
技師に向かって甲高い声で叔母が叫んだ。彼は僕を突き飛ばすと、玄関の金属のドアをたたきつけるように閉めた。ガシャンという音が重く響いた。
痛みと悔しさで、僕は技師が去ってからもしばらく床にうずくまっていた。

どのくらいたったのだろう。ほんの少しかもしれないし、とんでもなく長い時間かもしれない。
白いガウンを羽織った叔母の手が、僕の肩にそっと触れた。
「大丈夫？　ごめんね、廉君。ひどい目にあわせて」
平静を保とうと努めながら叔母が言った。泣き止んではいたが、いつだって泣きだしそうな感じだった。
「平気さ、あんなの」
僕は無理をして言った。
ほんとうは腰がジンジン痛んでいたし、悔しさで心の中が焼けきれそうだった。僕は技師をこてんぱんにやっつけている自分の姿を何度も想像した。でも、そんなことでは悔しさは晴れなかった。
体を鍛えなくっちゃ。強くならなけゃ。大好きな人を助けられないなんて……僕はそう繰り返し考えた。
「腰が痛むのね？　そうでしょ」
叔母が僕の目を覗きこむようにして言った。
「たしかシップがあったはずよ。あれがいいわ」
「平気だよ。痛くなんかないよ」
叔母は薬箱を持ってくると、中身を床に広げた。
「あったわ！」
シップ薬の入ったビニール袋を叔母は嬉しそうにパタパタと振った。
「これ効くのよ」
叔母は無理矢理僕のジーンズをぬがすと、ブリーフをずり下げ、腰と尻の境界の辺りに葉書大のシップを四枚ペタペタと貼りつけた。
しばらくして「あいつ何をしたの？」と僕はきいた。
「なんでもないのよ」と叔母は言った。
「だってあんなに」
「なんでもないの！」
叔母は寝室のベッドに倒れ込むと、そのまま動かなかった。痛む腰をかばいながら、僕は叔母に近づいた。
叔母は、声を押し殺して泣いていた。
「あっちへ行って、廉君。お願いだから。このまま、放っておいて」
聞き取れないほど小さな声だった。
叔父が戻って来ればいいのに、と僕は思った。そうすれば、もっとうまく慰めてあげられるのに。
僕はベッドを離れると、居間のソファに腰をかけた。家に帰ろうか、それとも、このままここにいようか、僕は迷っていた。
正面の飾り棚には、叔父が紀伊国屋で買ってきた砂時計が以前と同じ位置に置かれていた。僕はそれを手にとると、テーブルの上でひっくりかえした。落ちていく砂が山を作り、その形がたえず変化した。この部屋では時も

そんな風に変化するのかもしれない。止まりかけたり、急に早くなったり、ほんとうに止まってしまったり……

日の暮れがやってきた。

あたりはモノクロの写真のように急速に色を失った。僕はそっとベッドに近づくと、濃い紫色の光の中で叔母の顔を覗きこんだ。叔母はかすかな寝息を立てていた。形のいい口元が少し開き加減で、ほほ笑んでいるように見えた。

その夜、僕は叔母の家に泊まった。「帰らない」って電話をかけると「どうしてそんな勝手なことばかりするの！」と、母の不機嫌な声が返ってきた。

「叔母さんの具合が悪いんだ。熱があるみたい。うんうん唸ってるんだ」と、僕は嘘をついた。

「ほんと？　お医者さん、呼んだの？」

「来たよ。髭面の医者がね。やぶ医者なんだ。僕が殴りつけてやった」

「変なこと言ってないで、お医者さんにまかせて早く帰ってきなさい。あしたは学校でしょ」

「叔母さんちから行くよ。遅刻しないでちゃんと行くから。大丈夫さ」

「ちょっとサキさんに代わってくれる？」

「駄目だよ。今、眠ってるんだ」

「一人で大丈夫なの？　なんなら父さんに行ってもらおうか？」

「いいよ。ちゃんとやるから」

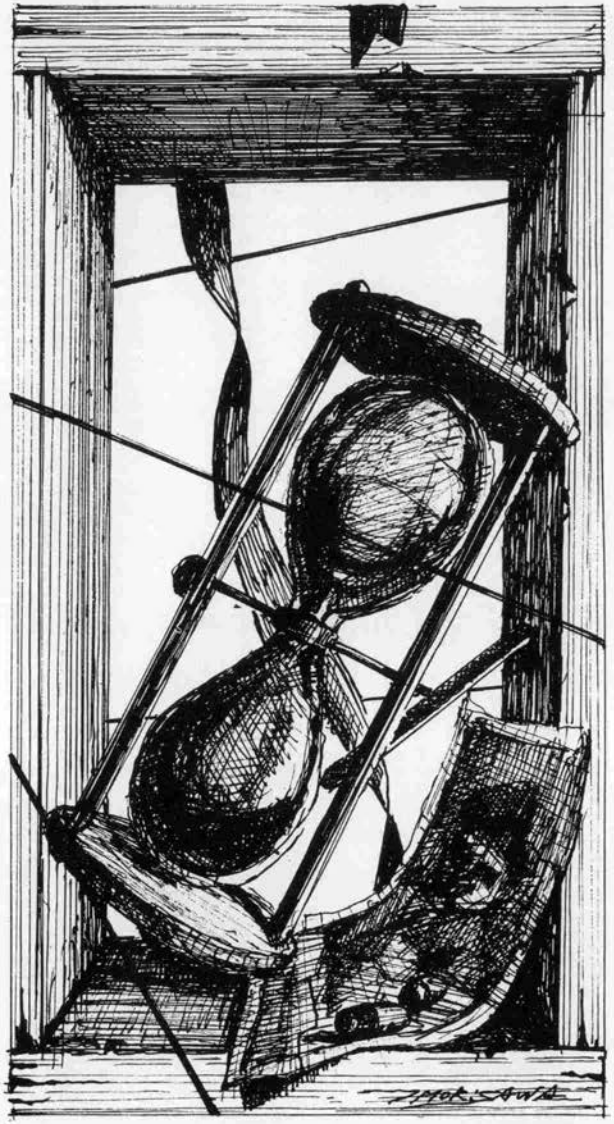
「食事は？」

「大丈夫って言ってるだろ。おやすみ」

僕はそのまま一方的に受話器を置いた。

今頃、母は父を相手に僕のことを非難しているだろう。

どうしてあの子はあんな変てこな子になったんでしょう、って……



居間のソファに戻ると、僕はその上に横になった。頭だけを起こすと、ちょうど目の位置に窓があった。窓の外には暗い闇が隙間なく広がっている。じっと見つめていると、闇の濃淡が見えてきて、森の影が一際黒く浮き上がった。

静かだった。人の声も車のエンジン音も何ひとつ聞こえてこない。聞こえてくるのは風の音と木々のざわめき、それに森の中の鳥や獣の鳴き声だけ。

ほかの住人はいったいどうしているのだろう。みんなこの暗く静かな夜の底にシーラカンスのようにひっそりと身をひそめているのだろうか。闇を見、風の音を聴いているのだろうか。

何だか恐くなった僕は急いでテレビのスイッチを入れた。極彩色の騒々しいCMが画面に現れ、いくらか救われた気持ちになった。

せめて、エンクルマでもいてくれたら、と僕は思った。僕がこの部屋にやってくると、あいつはどうして姿を消してしまうのだろう。

結局、眠る以外にやることはなかった。早く眠ってしまおう。テレビをつけたまま僕は無理矢理目を閉じた。

しかし、そんなに簡単には眠れなかった。僕の神経は冴え渡っていた。絶縁の剝がれたエナメル線のように敏感だった。ふだんならとても聞き分けられないような小さな物音にも気付いた。

そのうち僕は喉の乾きを覚えた。冷蔵庫の中を探せばコーラか何かが見つかるかもしれない。でも、僕はソファから立ち上がらなかった。キッチンで何があったか知ってる僕は、一人でそこに入っていく勇気はなかったのだ。

雨はまだ降り続いていた。窓の隙間から夜の雨の匂いが流れこんだ。そのなかに懐かしい匂いが混ざっていることに僕は気づいた。古い本の匂いとたばこの匂いが混ざりあった匂い……叔父の匂いだ！　間違いない。叔母と並んで海を眺めている時の眩しそうに目を細めた叔父の顔が頭に浮かんだ。

普段無口な父は、酔うとよく叔父のことを非難した。

「僕はあいつみたいに気まぐれな死を選ばないね。卑怯だよ、あんなの」

「何言ってるの。あの女がみんな悪いんじゃない。種を蒔いたのはあの人よ」

と、母は返した。

「何もあんなに急ぐことはない。あんなに早く死ぬことはないんだ。自然にまかせればいい。あんなに唐突にゲームをするように逝ってしまうなんて。あいつには時間がありすぎたんだ。いろいろ考える時間が。そんなものは害になるだけだ。後に残ったものに失礼じゃないか。残酷すぎる」

「仕方ないじゃない？　あの人に問題があったのだから」

「たんなる噂じゃないか。それに、そんなことで」

「そうかしら？」

「何のメッセージも残さないなんて失礼だって言ってるんだ。サヨナラの一言だけなんて」

「あの人はどうしてあんなに平気でいられるのかしら。私ならあの部屋に住み続けることなんてできないわ」

「あいつが悩んでるってことに少しも気がつかなかったなんて兄として失格だな……でも……だからって……ピクニックに行くみたいに、兄さんサヨナラはないだろ」

父はアルコールのまわった真っ赤な顔で、鼻をぐすぐすいわせながら言った。そして最後にはきまって「あいつは弱虫だ。自殺なんて弱虫のすることだ」と繰り返した。

叔父がその場にいたら、「まいったな、兄さん。もう十分反省してますよ」って、あの柔らかなスマイルで、けむに巻いてしまうだろうか。

〈つづく〉